

研修コアカリキュラムについて

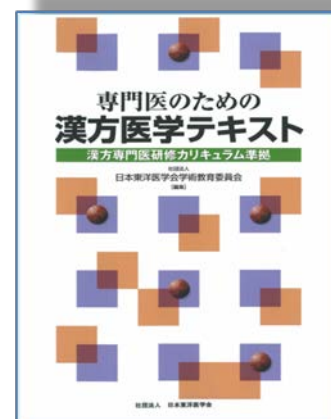
研修施設において研修コアカリキュラムを基に、実りのある研修を実施すること。
また研修コアカリキュラムに拘らず更に高みを目指すこと。

研修コアカリキュラムの特徴

1. 西洋医学全分野の個々の疾病に対し、病名によらず、漢方医学的に訴えや所見をとらえ代替補完している。
2. 『専門医のための漢方医学テキスト—漢方専門医研修カリキュラム準拠—』と連携している。2009年 南江堂刊
3. 各項目の到達目標に R1, R2 の2段階を設けている。
R1：理解し経験する必要がある。
R2：理解または経験することが望ましい

※研修コアカリキュラム II. 方剤からみる漢方

3. 安全性・副作用 B. 注意すべき副作用 1) ~4) の R2 指定について
重要であるが、必ずしも遭遇できるとは限らないためである。直接間接を問わず経験することが望まれる。



書店・南江堂へ注文してください

研修コアカリキュラム

I. 病態から見る漢方

1. 漢方医学の基本理論 A. 陰陽説 R1 B. 五行説 R1 C. 三陰三陽と経脈学説 R1	C. 問診 R1 D. 切診 R1 1) 脈診 R1 2) 腹診 R1
2. 病態と治療 A. 虚実 R1 B. 寒熱 R1 C. 表裏（内外） R1 D. 六病位（三陰三陽病） R1 E. 気・血・水 R1	4. 病態治療一般 A. 合病・併病 R1 B. 治療中の病態変化 R1 C. 西洋医学との併用 R1 D. 養生・食事 R1 E. 標治・本治 R1 F. 補法・瀉法 R1 G. 効果判定 R1 H. 西洋薬との併用 R1 I. 未病 R1
3. 診察法・四診 A. 望診一般 R1 1) 舌診 R1 B. 聞診 R1	

II. 方剤からみる漢方

頻用または重要処方^{*}について

※「頻用または重要処方」という表現の指すところは、学会より出版されている各教科書記載のものとする。

1. 生薬と方剤 A. 生薬 1) 基原 R1 2) 修治 R1 3) 品質 R1 4) 四気・五味と薬能 R1 5) 成分と薬理作用 R1 B. 方剤 1) 構成生薬と君・臣・佐使 R1 2) 組み合わせの効果 R1 3) 加減方と合方 R1 4) 服用（投与）方法と注意点 R1 C. 剤形 1) 湯液 R2 2) 丸剤 R2 3) 散剤 R2 4) エキス剤 R1 5) 外用剤 R1	2. 主な方剤群 A. 主な生薬による 1) 桂枝を含む方剤群 R1 2) 麻黄を含む方剤群 R1 3) 柴胡を含む方剤群 R1 4) 黄連を含む方剤群 R1 5) 大黄を含む方剤群 R1 6) 石膏を含む方剤群 R1 7) 人参を含む方剤群 R1 8) 地黄を含む方剤群 R1 9) 附子を含む方剤群 R1 B. 主な作用による 1) 気剤 R1 2) 駆瘀血剤 R1 3) 利水剤 R1 4) 補剤 R1 5) 瀉剤 R1 6) 滋陰剤 R1
---	---

3. 安全性・副作用		3) 湿疹・皮膚炎	R2
A. 安全性・副作用一般	R1	4) 肝機能障害	R2
B. 注意すべき副作用	R1	C. 西洋薬との相互作用	R1
1) 偽アルドステロン症	R2	D. 眩暈	R2
2) 間質性肺炎	R2		

Ⅲ. 症候からみる漢方

1. 頭部		4. 四肢・関節・皮膚	
A. 頭痛	R1	A. 浮腫	R1
B. めまい・耳鳴り	R1	B. 関節痛・神経痛	R1
C. くしゃみ・鼻汁・鼻閉・後鼻漏	R1	C. 感覚障害・運動不全・ 不随意運動	R1
D. 口腔内違和感	R1		
2. 胸部		5. 全身・精神	
A. かぜ症候群	R1	A. 疲労・倦怠感	R1
B. 慢性咳嗽・痰	R1	B. 虚弱体質・冷え症	R1
C. 喘鳴・呼吸困難	R1	C. 抑うつ状態・不安・不眠	R1
D. 動悸・息切れ	R1		
3. 腹部		6. 検査異常	
A. 食欲不振・悪心・嘔吐・胸やけ	R1	A. 代謝性疾患	R1
B. 便通異常（便秘・下痢）・腹痛・ 腹部膨満感	R1	B. 腎機能障害	R1
C. 排尿異常	R1	C. 肝機能障害	R1
D. 月経異常	R1	D. 貧血・出血傾向	R1

Ⅳ. 鍼灸

1. 病態把握	R2
2. 経絡・経穴	R2
3. 適応・禁忌	R2
4. 治療	
A. 鍼（種類・刺激法）	R2
B. 灸（種類・刺激法）	R2
5. 安全性	R2

Ⅴ. 西洋医学各専門領域における漢方治療

1. 専門医領域	R2
2. 専門外領域	R2